

松田 寛史さん

Hirofumi Matsuda



支援事業部に所属し、法的支援と生活支援を担当。

業務について、1日、もしくは1週間のルーティンを教えてください。

<1日ルーティン>

-10:00 出勤

-11:00-11:45 レジストレーション（初回来訪者の新規登録を行います。名前や生年月日など基礎的情報から、在留資格や難民申請の有無、難民申請理由なども聞き取ります）

-12:30-13:30 相談対応

（法律面や生活面での相談業務に乗ります）

-13:30-14:00 昼食

（対応状況により、昼食が遅くなることも多いです…）

-14:00-16:30 病院同行

-16:30-18:00 クライアント（被支援者）対応（食料提供、電話対応等）

-18:00-19:00 相談業務終了、クロー징作業

（事務所消毒、食料補充、ホテル探し・予約など）

-19:00-20:00 残務処理

（記録記入や経費の処理等を行います来訪者数が大幅に増え、残業も多くなっています。）

・来訪者が30～40人で多い日は、相談業務が連続して5件くらい入ることもあります。

・毎週木曜日は事務所を閉めて支援現場のスタッフ全員でクライアント状況の共有、支援対象者の判断、支援内容の協議などを行います。

どういったきっかけで難民支援のお仕事に携わるようになりましたか？

もともと両親が障がい者に関わる仕事をしていた影響や、ボランティア等の経験を通じ、障がい者福祉、地域福祉に関心を持つようになりました。ソーシャルワ

ークが学べる関西の大学に進学し、ゼミ活動を通じて、国際福祉、多文化ソーシャルワークにより強い関心をもつようになりました。ゼミ活動を通して海外の子どもたち、とりわけストリートチルドレンや難民コミュニティの存在を知る機会があり、実際に現地に行って、学びを深めたいと思い、1年休学し、フィリピンとカナダに留学しました。留学中や留学後もフィリピンでは、ストリートチルドレンに関わるボランティア活動に参加し、不平等、格差を肌で感じるようになりました。帰国後、当時の UNHCR インド事務所の代表からお話を伺う機会があり、インドにもアフガニスタンやアフリカから難民が大勢来ていることや難民の半分が子どもたちだということを知るに連れ、難民への関心が湧くようになりました。大学院進学後、UNHCR インド事務所でインターンシップをする機会をいただきました。現地では、とにかく難民の数の多さに衝撃を受けました。今も、事務所で来訪者がかなり増えていますが、それとは比べものにならないほどでした。さまざまな国籍の難民が UNHCR の登録を待っており、座る場所もないほど混みあっていました。難民の人たちは、今の状況にフラストレーションが溜まり、切迫した状況を肌で感じたことは今でも鮮明に覚えています。

その後、UNHCR 駐日事務所でインターンシップに参加しました。そこで働いて初めて、日本でも難民に対する医(衣)食(職)住の資源が十分ではなく、最低限度の生活さえ送ることのできない難民の存在を知りました。福祉の勉強をしてきたつもりなのに、野宿を強いられている難民が日本に存在することを知らなかったというのは自分にとってはショックでした。それをきっかけに、大学院やボランティア、インターンで経験したことを還元したいと思い、難民支援協会に入職しました。

大事にしている言葉は 「人ひとりは大切なり」

一つのお仕事として、どこにやりがいを感じられますか？逆に、難民情勢や日本政府の難民政策など、日々色々な事があると思いますが、どういう時に大変だと感じますか？

自分の仕事にやりがいがあると答えられますが、楽しいですか？と聞かれると、簡単に楽しいとは言えませんですね。やはり普段から厳しい状況に置かれた人たち

と関わっていますし、日々相談業務に追われ、なかなか自分自身に余裕もないのが正直なところです。そのような状況ですが、難民ご本人が自分で考えて決めていくプロセスの中で、私たちは選択肢を提示しながら、ご本人の力を引き出すことができたときにはやりがいを感じます。例えば、日本語を勉強したいというご本人に教材を渡し、それをもとにご本人が一生懸命努力し、日本語でコミュニケーションを取られる様子を見ると小さいことかもしれませんが、支援して良かったなと思います。現状は、大変困難な状況に置かれた方からの相談が多いです。日本に来て経済的に困窮し、頼れる人がいないという状況の人たちばかりなので、なかなか状況を改善してあげられない無力感を感じることもあります。

この仕事に就く前までは、住む場所があること、仕事をする、学校に通うことは当たり前の権利と思っていました。自分自身も食べることも飲むことも何なく自由なく生きてこられました。一方で難民の方たちは、母国でも大変厳しい状況を生きてこられた方が多くいらっしゃると思いますが、日本に逃れてきても、今の日本社会では基本的な人権や権利が守られてない状況があるわけですね。日本に来て難民申請をして、RHQ（外務省の外郭団体）の制度を申請する権利があ

っても、実際はもらえるまでに平均して 90 日以上、4、5 か月かかる人もいます。その期間、食べるものも寝るところも確保されていない日本の制度はおかしいと日々感じています。そして、おかしいと思っている人が沢山いるはずなのに、それが変えられていない現状、日本政府も変えようとしてくれない、そもそもの制度がないので、当事者の人たちは本当に苦しい、つらい思いをしているだろうと肌で感じます。日々もどかしい思いをしています。本当はインターネットカフェには寝てほしくないですが、お金の限界もあります。僕が難民になったとして、海外のインターネットカフェで1週間、1 か月寝ることになったら心身の状態保てないと思います。そういう人たちが沢山いることを、もっと知る人が増えて日本社会がもっと変わってほしいなと思います。

難民の方々について、実際に接する中でどのような印象を受けますか？

自分の中で大事にしている言葉があって、通っていた大学のキャンパスに掲げられていた大学の創設者の言葉なのですが（笑）、「（諸君よ、）人ひとりは大切なり」という言葉が私は好きです。僕の中では、難民だからというよりも、一人の人だから、というのを大事にしたいと思っています。もちろん、さまざまなバ

ックグラウンドがあり、宗教的な配慮や難民だからこそ配慮しなければならない事など色々ありますが、一人の「ひと」が難民申請をして、この厳しい状況を生きている、その方々を一人の「ひと」として関わっているのだと思っています。

支援をしている立場であっても、この出身国の人たちは大体こうだと決めつけてしまうことが時にはありますが、同じ国籍であっても一人ひとり異なるバックグラウンドをもっているのです、やはり国籍や何かで括ってカテゴライズするのは、支援にそぐわないなということはあると感じますし、そこに敏感でいたいなと思います。

業務にあたる際に、特に求められるスキルを三つご紹介ください。

「対人援助力」、「自己覚知」、「専門性」の三つを考えました。「対人援助力」は、傾聴や受容などいくつかのエッセンスがあると思います。色々なクライアントがいて、怒ったり涙したりするクライアントがいるので、支援する立場としては、クライアントの感情に流されず、自分の感情をうまくコントロールすることが大切です。同時に、クライアントにとっては、JARが安心して感情を表出できる場所であってほしいので、

表出できる空間を作ることも大事だと考えています。それをまとめる言葉が「対人援助力」です。丁寧な聴き取り、日頃のコミュニケーション、事務所に来たときからの関わり方や話し方を意識することが大事で、私自身もっと大事にしていきたいと思っています。

「自己覚知」は、「自分の感じ方、考え方の傾向、知識や技量について意識化し、自ら把握する」ことを指します。自分を俯瞰して、客観的に見るのが求められますが、最近は忙しさに追われてあまりできていないと感じることが多いです。その結果、クライアント対応に差が出てしまったり、compassion（共感）や思いやりを示すことが疎かになると感じることもあります。やはり、支援をしていく中で、自分がどういう傾向にあるか、自分を見つめなおす、「自己覚知」の時間は必要かなと思います。

最後に「専門性」です。法律や生活に関する専門性です。すべてを覚えるのは不可能ですが、難民支援に関わる必要な知識をきちんと勉強する姿勢は大事です。わからないことは、自分で調べたり、市役所や病院、入管などに問い合わせることもあります。自分の引き出しをたくさん作っておく。そうすることで専門性を高められ、つなげられる支援も増えていくと思います。

最後に、JARをはじめとした人道支援の団体で将来働きたいと思っている、興味がある方に向けて一言お願いします。

これまでお話ししたことではありますが、一人ひとりの人に関心をもってもらいたいと思いますし、大切にしたいなと思います。難民だから助けるのではなく、一人のひとが困っていたら助ける、小学校でも教えてもらうことですが、大人になると躊躇やためらいがあり、一歩が踏み出せないことがあります。難民のことを知って考えてもらう時間を取っていただきたいと思いますし、隣人、人ひとりを大切にする、その中に難民の人がいるという考えが大事ではないかと思います。それが難民支援にも繋がっていくと思いますし、難民の状況を変えていくうえでも、大事なキーワードになると個人的に思っています。すでにボランティアやDANDANRUNの活動に関わっている皆さんは、そのアンテナの高い方々だと思いますが、一人ひとり、身近にいる人も含めて大切にしたいなと思います。